

小田原市文化振興審議会 第2回会議概要

1 日 時 令和2年11月24日(火) 15:30~17:00

2 場 所 小田原市役所 3階 全員協議会室

3 出席者

(1) 委員

杉本委員、大石委員、関口委員、木村委員、萩原委員、外郎委員、鈴木委員、池田委員、浅井委員

(2) 行政

石川文化部長、古矢文化部副部長、和田文化政策課長、諏訪部文化政策課副課長、穂坂主査、原主事

4 傍聴者 0人

5 会議の概要

(1) 議題

・「文化によるまちづくり条例の基本計画(骨子案)について」

計画策定に至る経緯について、事務局より、資料に基づき説明

・市民ホールについて(市民ホール担当課長より説明)

第4章の基本目標2に、市民ホールに与えられた役割が書かれている部分なので、こちらをご覧ください。

小田原の土地にある自然・文化・歴史、小田原で生活している人々が内面に持っているものから発露して初めて、文化や芸術は振興するものであると考えている。人の集まる場所である市民ホールの運営や事業を通して、市民が結び合うことを積み重ねていけば、自ずとすべての市民が文化に親しみ、身近に触れ合う状況が生まれてくると理解している。

市民が使いやすく客席から舞台が見やすい、音響のいい市民ホールを実現すれば、市民ホールの稼働率と評判は高くなると思う。ただ、クローズ空間である市民ホールが、どんなに華やかであっても、外からはにぎわっているように見えない。市民の皆さんが好きな時に訪れて、好きな場所で好きに過ごし、好きな時に帰っていく。市民ホールのロビーやホール前広場、隣に整備する観光交流センターを、日常的に人々が自由に入出りできる施設として整備していきたいと考えている。そのような交流空間になって初めて、まちの回遊性やにぎわいを創出できると理解している。

市民会館から市民ホールに、建物が新しくなっただけでも、市民の皆さんに喜んでいただけていると思っているが、市民ホールを運営する職員が、市民の文化活動について一緒に考え、アイデアを出し、他の団体やアーティスト等との協働作業をコーディネートすることで、ただ建物が新しくなっただけでは市民ホールになれると思うので、その

ような努力は惜しまずやっていきたい。

いうまでもなく、小田原にはすでに多様な文化があり、多様な優れた芸術活動があり、力のあるアーティストがたくさんいる。しかしながら、時代に合わせて活動の在り方を変えていかなければ、新しい表現が生まれにくくなり、広がりや欠けてくるのも事実である。

例えば、ひとり親世帯で育っている子どもに、時間的にも経済的にも余裕のない親御さんに何ら負担をかけることなく、舞台芸術を鑑賞してもらったり、ピアノやバイオリン、絵やバレエを習う体験をしてもらったりと、そのような支援を市民の総力を挙げて実現をしていくことも、これからの時代は必要なのではないか。そういったことを市民の方に提案し、一緒に小田原の文化芸術の発展に寄与していただけるようにしていきたいと考えている。

○会長

今事務局から説明があった、骨子案について皆さんで議論していただきたいと思う。

まずは、本日欠席の吉田副会長の意見をご紹介します。

- ・基本計画ということですが、具体的計画は別に策定するのですね。目標値など設定できれば、適正な評価につながります。
- ・基本目標4のところ、「世界が憧れるまち」にするために、世界に向けて発信することに言及するのも必要ではないかと思いました。
- ・基本目標4がとても大事なのに施策が書いていないのは、これから書き込んでいくことでしょうか。ここに「発信力」「多様性」などを入れてもいいかと思います。
例えば、「時間と空間を越えて、小田原発の文化を享受する機会を全世界に提供します。」
「国籍、性別、世代、障害の有無にかかわらず、多様な人々がともに文化を創造する風土を醸成します」

といったようなご意見をいただいた。

○A 委員

吉田委員の意見に共感する。誰でも文化芸術に触れられる、そういう場所である市民ホールがあるのは、重要なことだと思う。大石委員の説明にもあったが、誰もが豊かな暮らしを目指しているわけで、それが経済的に叶わないというのは、できれば避けたい。ぜひ、計画のどこかに文章に入れていただければ。

世界に向けた発信は必要。障がい者のアート支援を続けているが、このコロナ禍で、オンライン展覧会を開始した。家にいるしかない障がい者が、どんな暮らしをしているのかということも SNS で発信し HP に載せた。こういった発信の仕方も、今後活用していくといいと思う。

○会長

今、コロナ禍でバーチャルとリアルが共存するような状況ができています。この計画の中に、

コロナという記載を入れていいかわからないが、社会が変わってきている所なので、計画にも何らかの対応が必要かと思う。

市民ホールに小田原中の全員が集まれるかということ、そうはいかない。スーパーシティ構想を掲げる小田原市が、今後デジタル化して、情報発信していくのは必要なことだと思う。

○B 委員

現在の市民会館は、建設当時、大変注目を浴びた。

小田原というまちは、人を引き付けているようで引き付けられない所もある。人を引き付けるものが何かというと、これから完成する市民ホールではないか。デザインが素晴らしく、市外にも、今後多くを発信していける文化施設だと大歓迎している。建物としてだけでなく、景観を眺める場としても素晴らしい。今後、新しく伸びやかな展開を見せてくれると、大変期待をしている。

○C 委員

第1章に、第1回審議会での意見を入れていただいた。これを、第4章「基本目標と取り組み内容」にどう落とし込んでいくかが課題であり、大切な所であると考えている。

確認だが、最終的にこの基本計画は、関係者だけでなく市民、市民ホールを使用する人達が、具体的に行動できるレベルの計画になるのか。それとも、現場と少し離れた状態の計画になってしまうのか。できた計画が素晴らしいものだったとしても、我々が使いこなし、振り返りができないといけないと思う。

基本目標や施策等に教育・福祉・産業・観光といったいくつかのカテゴリ別のマークを付ける等、誰に対してメッセージを出しているのか、わかるとより良いと思う。また、この計画の中に、補助金予算など具体的な支援策が取り込めるといいと思う。資金以外でも例えば、小田原市が認める文化活動には認定証を出す施策を作るなど。

文化的に小田原に足りないと感じているのは、美術館が一つもないことである。文化財の公開には博物館が必要。この計画期間は10年とのことで、10年では難しいかもしれないが、何かしら計画に記載しておいて、次につなげることも大事かと思う。

○文化政策課長

今回策定する計画は、今後文化によるまちづくりのための指針となるもの。この計画に従って行政も様々な事業を展開していくこととなる。ご承知のとおり、予算の裏付けもなく、実際予算が取れているものではない。

計画は、大きな理想論を掲げて策定すると、実際施策を行う際に全く実行性がないという事態に陥ることもある。かといって、計画自体が利便的なものになってしまうと、何も実行できない、具体的な施策が打てないということがある。今回は、文化によるまちづくり条例の計画であり、様々な文化のステークホルダーの皆さんに集まっていただき、検討を行っているので、実行性のある計画を立てていきたい。

更に、計画を立てることがゴールではないので、その後の計画評価、計画期間の10年間

の中で、毎年確認していく必要があると思っている。このため、計画の立て方は難しいが、なるべく実行性のあるものを施策として入れていきたいと所管としては考えている。

○C 委員

計画を上手く立てられれば、議会運営の中でも予算がとりやすい・動きやすいという事か。

○文化政策課長

そういった面もあると思う。

○会長

事務局に確認したいのだが、計画の冒頭の内容は、かなり広い範囲をカバーしている。文化政策課を中心に計画策定に動いていると思うが、施策を決めたとして、各課との連携はどのように行うのか。今回、条例のタイトルにも「まちづくり」が入っており、まちづくりに関する所管課等が関わらないと施策は実行できないと考える。うまく連携できるのか。

○文化政策課長

ご指摘のとおり、今回「文化によるまちづくり」ということで、文化だけではなく、非常に広い範囲をカバーするような、条例をもとに計画を作る事となる。このため、庁内の連携体制については、非常に重要になってくる。縦割り行政で横の連携が難しいという話であると思うが、文化によるまちづくり条例を提案した際、議会の中でも全員の一致をいただいている。市としても、非常に強固な施策の一つだと認識している。連携をしていかなければならないと思っている。前例がないかやらないということではなく、新しいことにチャレンジしていこうというのが、現在の市の姿勢なので、今回の新しい計画については、全庁的な取り組みとし、各施策とも事業展開を図っていきたい。

○会長

第5章にしっかりと表現していただけるといい。

○D 委員

3点お話ししたい。1点目は前文について。まちづくりの観点から小田原に元々ある文化を見ると、例えば北条時代の志向・思想や報徳思想なども小田原の文化ではないかと考える。

2点目に、今回は単なる文化振興でなく、文化を通じたまちづくりということなので、審議会に様々な分野の方が集まっている意味がよくわかった。コロナ禍で文化は不要不急ではとの話もあったが、改めて文化の存在価値や意義、人間の生命維持装置くらい重要な存在だということが、再認識されたと思う。個人的にも、文化は非常に大切なものだと思っている。

今回の計画骨子案の中で、行政の役割として「活動の下支えとなるよう、必要な施策を実施します」と記されている。文化活動を下支えするには、どういう力が必要なのかを考えると、それは資金だと思う。資金がないと文化活動ができないということではなく、文化活動

をするためには、資金が必要である。どこからどう調達し、どのように回すのか。小田原ならではの文化を、多くの市内外の方に触れていただくにも資金が必要である。資金のことを抜きにして計画を作っても意味がなくなってしまうのではないか。資金の使い道、使い方は書いてあるが、どこがどう調達するかということも併せて考えていかないと、絵に描いた餅で終わってしまうと思う。予算をこうつけるという話や、行政が補助金を出すという話ではなく、いかに地域で資金を回すのか、その観点がもう少し必要かと思う。

3点目に、計画期間が2030年までということで、SDGsの期間とぴったり合う。SDGsという言葉を使うかどうかは別として、この観点も含め、計画を作っていくべきではないか。

○会長

SDGsの17項目の未来目標には文化がない。きちんと位置づけをしておいた方がいい。

○OD委員

文化によるまちづくりを推進するうえで、SDGsの視点で進めていけばいいかと思う。

○会長

確かにつながってくるものだと思う。

○OE委員

地域の中の活動についてお話ししたい。

第3章(2)文化の担い手と役割の部分で、「市民の自主性、創造性、多様性を尊重し、その活動の下支えとなるよう必要な施策を実施します」とある。市民の自主性、創造性、多様性を作り上げるには、市内各地域での活動が重要なのではないか。基本目標の中でも「輪を広げる・つなげる」という言葉を使っているが、市民ホールを中心にして、市全体がどう文化に関わっていけるかを、もっと計画に入れた方がよいのではないか。市民ホールでの全市を挙げた活動と地域の文化活動とが、上手く交わるようにしてあげられれば良いと思う。市内には地区公民館が130ほどあるが、担い手が不足して、地域で文化活動をしようと思っている方もなかなか使えない状況である。市の中心としての市民ホールと、市内の小さな文化活動がつながる仕組みを整えるためにも、地区の公民館の活動に目を向けていただければ。

「生涯学習活動との連携」という施策が、基本目標3の中にも入っている。今の20代から4・50代の、あまり市内の文化活動に出てこない方が、気軽に参加して地区公民館が使えるような状況になることが、これから20年30年先の小田原市に非常に大きな意味を持って来るのではないか。今後を担っていくのは今の若い世代。特に小さい子どもたちを育てている年代の方たちが、互いの経験を共有しながら、市内で生き生きと暮らしていけるような、そういう場を地域の中で作っていただけるとよい。

「まちあるきの促進」という施策も、基本目標3の中に入っているが、有名な場所ばかりでなく、まちあるきのスポットとなっていない所でも魅力的な場所、謂れのある場所、地域的な資源はある。公民館のような、地域の発信が可能な場所を使いながらのまちあるきも考

えていけたらいい。

小田原に住んでいることに誇りを持つてることが、世界が憧れるまち小田原が出来上がる下地になると思う。小田原に来る人が増える、住みたくなるようなまちにするためには、小田原の人達のマインドが伝わりやすい文化の発信というのも必要だと思う。これまでも十分に掘り起こしてきたと思うが、更に明治・大正・昭和という時代に立派な仕事をされた小田原の方々を掘り起こし、彼らが暮らして歴史文化を作ってきたまちだということも、発信できるようになればいい。個人的には、「技人」にのる方々、石井富之助図書館長、五十嵐写真館創業夫妻・星崎記念館の星崎定五郎氏など、小田原に誕生した人々の人生を学ぶことで、文化を大切にしながら、多くの人が住みたいと思って移り住んでくれるようなまちしていきたい。ぜひ地域での活動を、一つのポイントとしていただきたい。

○文化政策課長

今回、第3章の目指すまちの姿・2つ目に、「地域からまち全体が舞台となり、日常の暮らしに、文化が息づく魅力あるまち」とあるように、我々も各地域は重要だと考えており、計画に書き込めていないが、地域の活動が全体に広がっていくことが大事だという認識でいる。いただいたご意見を参考に、計画をブラッシュアップしていく。

○文化部副部長

社会教育委員会議の今年度の研究テーマが、「地区公民館」となっており、今後どのように展開していくかという課題について、研究していきたいと思っている。文化振興審議会でも、社会教育委員会議から情報をもらいながら、あわせて進めていきたい。

○B 委員

小田原は昔からある歴史遺産や伝統を含めて、まちが出来上がっている。失ってはならないものだが、歴史や伝統があるということが、心にゆとりを生み出すこともあり、これが小田原というまちの宿命とも言える。若い世代へ文化振興や価値観を誰がどう教え、どう育成していくか。これが一番難しい問題だと思っている。小田原は素晴らしいまちだが、のほほんとして生きられるまちでもあり、これが面白い様相を呈している。新しい文化を作ることに対しいろいろな意見もあると思うが、小田原の良さをなくしてはならない、ということ強く言いたい。

○会長

先週シンポジウムで、企画政策課からコロナ禍の人口動態を見せてもらった。ステイホーム等で東京の人口密度は下がっているが、小田原は横ばいで10月はむしろ少し上がっている。小田原のような距離感の場所の人气が高まっており、また、文化があって利便性の高い部分が見直されているとも感じた。これが本来の小田原の良さだと思う。外から見ると本当にいい所。水や食べものが美味しく、海山川がそろっている。

これまで人口が増えなかったのが課題で、若い世代が魅力を感じる所がより必要なのだら

う。中高生から公園が全然使えない、活動するようになっていないという声もあった。過去に平塚市で高校生の居場所を調査した際、コンビニの前という結果が出た。コンビニの前だと追い払われることがないということだが、つまり、まちの中に居場所がないということ。中高生の居場所をもう少し増やさないと、人口増には結び付かないかもしれない。

まち中が文化的な場所になれば、自ずと文化によるまちづくりができる。最近若い世代の中には、カフェの中にコンサート等を行うスペースを自ら作り、お金を稼ごうという意識も出てきているので、多様なチャレンジができるような施策ができればいいと思う。

○F 委員

計画が 2030 年までの 10 年計画ということで、長い計画だなと思うが、市のロードマップを書き換えるのと時間軸を合わせているのだと思っている。

来年オープンする市民ホールは、この先 10 年、市民の文化活動の中心的な場所となる。市民が音楽や芸術、日本の伝統を市民ホールで見ながら感性を磨くととなり、その結果として、新たに外から学んできた文化的な素養を活かし、市民ホール等を活用しながら発表・発言等ができるようになると、市民の文化活動、文化的素養の充実・向上につながっていくのではないか。市民ホールは、観光客というよりは、市民の方々が対象。アクセスし易く、かつ発表・発信のし易い場所であればと思っている。

また、市はスーパーシティを目指すということなので、文化についてもデジタルと紐づけすることがポイントかと思う。基本目標 3 の施策 2 の中に、「SNS を活用した情報発信」とあるが、もう少し基本目標の中にデジタルの話が入ってくると、市の施策に紐づけられるのではないか。

○会長

市には日本先端大学開設の話があると聞いているが、大学では IT 系の研究等が行われると思うので、取り込んでいくのも一つの考えだと思う。

○G 委員

小田原市の文化活動の中心は市民ホール。

ただ、ホールに来られない人、高齢者の方等を考えると、各地区でも文化活動ができないと意味がない。文化によるまちづくり条例ということであれば、計画の中に、地域の話も入れるべき。でないと、建設された市民ホールに対して、この計画を作るのかという印象を受けてしまう。市民ホールに、市民全員が行くかというそれは難しい。自分の住む地域に文化活動が行われていると活動しやすい。市民ホールは一つの物で、市民ホールを支えるのはやはり地域。

計画を作りたいただけ、というのであればそれでいい。ただ、この計画を元に何かをやろうというなら、もう少し地域のことを考えた方がいい。社会教育会議の中でもそういう話が出ている。市はいつも計画等をただ作っただけで終わってしまう印象がある。作るのは結構だが、これをどう活かしていくのか。検討した方がいいかと思う。

○会長

事務局と話をした時には、それなりに地域の話が出た。計画骨子案に、地域の書き込みが少なかったか。市内に駅がこんなに沢山ある市も珍しく、更に公民館が130館もあるので、それをネットワークして考えてもいい。各地区それぞれ個性もある。まちづくりであれば各地区全体をネットワークするイメージを示していく必要があると思う。

公民館には文化だけではなく、それ以外の役割もたくさんある。それを文化という面からとらえた時に、この計画に反映させる手段が難しかったと思う。今後、考えなければならぬ。また、民間の施設についても取り込んでいくことを考えるべきだと思う。

○D委員

開成町の新庁舎は、日本で初めてのゼロエネルギービルディング（ZEB）で建設された。しかし、コロナの最中にオープンしたので、市民の方々を招待できない。先端的な建物だが、コロナを考慮すれば、ここに町民が来るか疑問に思った。デジタル化したら窓口に町民が来る必要がなくなる。ただ、すべてがデジタルですむわけではないので、人と人の触れあいや交流等が、今後公的な施設には求められるのではないだろうか。

○会長

今後、市民の居場所づくりが大事ということですね。

○C委員

文化部が持っている土地があると思うが、それをこの10年間で何かしたいとなったら、この計画に入れなくてはならないのか。

○文化部長

皆さんに議論していただいているのは基本計画で、今回の骨子案には、施策についてあまり具体的には書かれていないと思う。計画では、基本的な方針をうたっている。個々の案件が出た際は、文化部としてこの基本計画に齟齬をきたしていないか判断することとなる。個別計画の記載がないからできないということではない。記載があると予算がとりやすいかという話もあったが、例えば市長や担当者が変わっても基本方針が変わらないように、条例がありこの基本計画がある。市は、これに基づいて進んでいくという大方針があって、個別に施策を実施して行くということになる。文化によるまちづくりを進めていくための大方針をここで決めている。

○H委員

市民ホールはたくさんの方が集まる。市民ホールのような大きなものを、すべての地域に作るのは不可能。地域にあるお寺や公民館・集会所、使われていないお店や古民家等、職場と自宅以外の場所で、人が集まる場所があれば、そこに地域の人たちが集まって話し合いや地域の芸能を楽しんだりできる。だから、それぞれの地域に、人が集まれる場所が一つ確保

されていることが重要で、その一番大きい形のものが、市民ホールであるという認識である。

経済的な理由で、絵を描く・踊る・歌う事ができない、小田原で作った野菜や海でとった魚が食べられないという事があってはいけない。市が財政措置をするのが、一番望ましいことではあるが、市に頼っていては実現しないこともある。例えば、地域のひとり親世帯の子どもがピアノを習いたい習わせる手段がない、ということなら、地域社会の中でお金を出し合って、演奏家に謝礼を払い地域の公民館等でピアノを習うという体験してもらおう。こういった始め方もあるのではないか。理想論かもしれないが、「地域の子どもは、地域全体で育てる」地域社会があったらいいと考えている。

○OG委員

改めて申し上げるが、市民ホールは中心でいいと考えている。

○会長

実際計画を動かすために、市民参加について推進体制の中で示す必要があるのではないかな。

○OD委員

資金について、目を向けるべきは地域。地域の資金・ローカルファイナンスをどうするかを考えるといいのではないかな。

○OE委員

市民ホールと地域がつながればという話をしたが、市全体的につながるような仕組みができればよい。

○OC委員

文化は代々受け継いできているが、現在の担い手は高齢者が中心で、どう子供達に受け継ぐのかが課題。文化活動の担い手は誰なのか、次世代へのプレゼント、を意識して計画に盛り込んでいただきたい。

○会長

小田原は商人の町でもあるので、いろんなやり方があると思うので、様々にチャレンジして行くべきである。

今日は皆さまありがとうございました。次回もよろしく願いいたします。